

28 素直な柄か

浄土真宗では説教する為に口を開けば、誰でも、何処でも、何時でも、素直に聞け、赤ん坊が親に抱かれたように素直に成れと言っているが、素直に成れる柄と思っているのだろうか。赤ん坊は親を親とも知らず抱かれている事も知らず、たれ放題で感恩も知らなければ報謝も知らないが、真宗の道俗もそれでよいのか。三千世界を探したって素直な柄がいるものかい。それが法席に出た時だけ、信仰の話を聞いている時だけ 素直な風をしたって末が通るものかい。自分を素直な柄と買い被っているのが 既に傲慢ではないか。有難がってねこ冠って 悪を出さないようにして宗教を聞いているのが、信罪福の心を以て本願力を願求している相ではないか。又、心が定まった時の念仏は功德があるように思い、善根をした時の念仏は参れそうに思っているのが、定散の自力心に狂わされた念仏だから、金剛の真心を決定する事が出来ないのではないか。

無^む我^がの真^ま似^ねした有^う我^が、腫^{はれ}物^{もの}に触^{さわ}るような信^{しん}仰^{こう}を素^す直^{なお}なと思^{おも}い込^こんで、素^す直^{なお}に聞^きけと上^うから冠^{かぶ}らせているが、真^{しん}実^{じつ}の宗^{しゅう}教^{きょう}がそん^ごな誤^ご魔^ま化^かしで諦^{たい}得^{とく}出来^{でき}るものかい。法^{ほう}龍^{りゅう}も信^{しん}前^{ぜん}では素^す直^{なお}に成^なろうとどれ程^{ほど}苦^く心^{しん}したかわからない。御^お聖^{しょう}教^{きょう}に調^{てう}子^しを合^あわそうと どれだけ努^{どり}力^{りよく}したか判^{わか}らない。教^おえ通^とりになろうとどれ位^{くらい}あ掻^がいたか判^{わか}らない。仏^{ほと}様^{とけ}に近^ち寄^{かよ}ろうと策^{さく}励^{れい}して仏^{ほと}様^{とけ}に遠^とざかる自^じ分^{ぶん}をみせつけられた時^{とき}、微^み塵^{じん}いささか露^{つゆ}塵^{ちり}程^{ほど}も真^{しん}実^{じつ}らしい処^{ところ}もなく、三^{さん}千^{ぜん}世^せ界^{かい}の一^{ひと}塵^{ちり}も、四^し大^{だい}海^{かい}水^{すい}の一^{いつ}滴^{てき}程^{ほど}も素^す直^{なお}な処^{ところ}のないのに驚^{おどろ}かされたのだ。それが大^{だい}経^{きょう}では、唯^{ゆい}除^{じよ}等^{とう}の八^{はち}文^{もん}字^じとなり、観^{かん}経^{きょう}では下^げ々^げ品^{ぽん}に顕^{あらわ}れ、七^{しち}高^{こう}僧^{そう}の懺^{さん}悔^げとなり、聖^{しょう}人^{にん}様^{さま}では、

浄^{じょう}土^ど真^{しん}宗^{しゅう}に帰^きすれども

真^{しん}実^{じつ}の心^{しん}はありがたし

虚^こ仮^け不^ふ実^{じつ}のわが身^みにて

清^{しょう}浄^{じょう}の心^{しん}もさらになし

素直すなおな柄がらでない事ことに呆あきれて、捨しゃ自じ歸きた他たしておられるのに、素直すなおに成なれ、素直すなおに聞きけと御聖教おしやうぎやうに調子ちやうしを合あわすのはどうかと思おもう。何故なぜなれば、文字もじでなければ導みちびかれないが、文字もじを離はなれなければ真意しんいは味得みとくできない。指ゆびを通して月つきを拝おがむように、御聖教おしやうぎやうを通して仏意ぶつゐを諦得たいとくさして戴いただかなければならないのに、御聖教おしやうぎやうに調子あを合あわして、素直すなおに成なれ素直すなおに成なれとは、真似まねせよ、合点がってんせよ、有難ありがたがれ、と言いう事ことであつて、頭あたまは調子ちやうしを合あわすかも知しれないが、腹底はらぞこから承知しやうちするものかい。演習えんしゆうは気安きやすくすんでも実戦じっせんは通とおれないぞ。

法龍ほうりゆうはそんな皮相ひそうなものを素直すなおなどとは言いわなない。有難ありがたがつたり、真似まねしたり、調子ちやうしを合あわしたり、合点がってんする位くらいの信仰しんこうなら、難中なんちゆうの難なんとか、極難ごくなんの信しんと言いわれる筈はずがない。又難化難治またなんけなんちの重病じゆうびやうじん人じんとか、箸はしにも棒ぼうにも掛からない徒者いたずらものと言いわゆる筈はずがない。はいと素直すなおに聞きく位くらいなら、三世さんぜの諸仏しよぶつに疾とつくの昔むかしに救すくわれているわい。化土卷けどかんには、「悲かなしきかな、垢障くしやうの凡愚ぼんぐ、無際むさいよりこのかた助正間雑じよしやうけんざうし、定散心雑じやうさんしんざうするがゆえに、出離しゅつりその期ごなし。みづから流転るてん

輪廻を度るに、微塵劫を超過すれども、仏願力に帰しがたく、大信海に入りがたし。まことに傷嗟すべし、深く悲歎すべし。おほよそ大小聖人・一切善人、本願の嘉号をもっておのれが善根とするがゆえに、信を生ずることあたはず、仏智を了らず、かの因を建立せることを了知することあたはざるゆえに、報土に入ることなきなり」

と仰せられてあるが、聖人様を泣かしているのは、素直なと思っている自分一人ではないか。名号を浴びる程聞かされながら、助正間難し、定散心が雑わる為に出離の時期が無いのだ。何故かといえ、名号のお助けと聞かされながら 前三後一の助業が助太刀して、これ程勤められるから悪い処へは行かないだろうと機執が募り、心が定まった時の念仏は参れそう、善根励んだ時の念仏は行けそう、その反対が出れば往生不定の思いのするのは、明らかに自力の機執に動かされているのだけれども、そうと知らないのだから、出離の時期がなく永劫流転を続けるのだ。だから仏の願力には帰しがたく大信海には入りがたと仰せ

られてあるが、自分は本願に歸し信心を獲得したように思っているが、真似であり合点であり、知ったのであり、調子を合わせているに過ぎない事に気がつかぬのだ。聖人様は、切り刻まるる思いがするぞ。泣いても、地団太踏んでも足りないぞと悲歎せしめているのは、名号を聞かされながら解決が付かないで流転しているからだ。

「凡そ大小聖人一切の善人」等とは、自分の劣機が本当に知らされておらないから、他力廻向の名号を己が善根として喜び心をあてにして往生しようと思っているから、他力の信を生ずることが出来ず、仏智の不思議が諦得出来ず、名号六字を建立された根本を了知する事が出来ないから、報土に入ることが出来ないのだ、と仰せられたので、素直でない人間が素直な真似をして宗教を聞いているのだから、真実の深信の有る筈がなく、如実の信仰の有る理がなく、明瞭な水際の有る筈がない。

それならお前の素直なと言うのはどんなのかと問われたら御答えしよう。

自分は宿善が厚いと思つて聞いている時の素直さは、猫を冠つて聞いているのだから、深信ではなく合点であり、曖昧な妥協だから、無我でなくて有我だ。照らし出されて真実の根機を知らされ、育て上げられて不実の実機を知らされて、三定死の境地に立たされ、難治難化の悪性が気付かされ、三世の諸仏に見捨てられ、八千遍の御苦勞も空しく、唯除逆謗と捨てられた法龍が無明の酒に酔い潰れ、横車を押して叩きのめされている処に 真実の母親が走り寄り、自分の育て方が悪かった為にこの不始末、堪忍しておくれよと涙と共に血糊を拭いて下さる時、ふと正氣づき、お母さん済みませなんだ、この無頼漢を真実の子と思召せばこそ、すべての人から毛虫のように嫌われているのに、貴女一人は私を離れ切らないとは、どうした無限の大悲だろう、もう再びこの悪は繰り返しませんと、二種の深心の徹底した時が本当に素直に法を信じ、機を信ずる事が出来たのだ。